

大阪大学工学部生物工学系同窓会

尚醸会会報

第 29 号

大阪大学工学部

醸造・醗酵・応用生物学・バイオテクノロジー（学科目担当）教室・同窓会

尚醸会

令和 8 年 9 月

目 次

巻頭言	根来 誠司	1
教室の最近の動向	渡邊 肇	3
各研究室の近況		4
教員紹介	關 光	8
教員紹介	原田 和生	9
教員紹介	山口 哲志	10
<<同窓会通信>>		
近況報告：大阪大学での新たなスタート	馬場 健史	11
近況報告：阪大から東工大、そして東京科学大学へ	平沢 敬	12
令和 7 年度尚醸賞の授与		13
令和 7 年度 工学賞を受賞して	久保 夏実	14
令和 7 年度 尚醸会バイオテクノロジーセミナー 報告	梶浦 裕之	15
令和 7 年度 尚醸会企画 OB・OG 懇談会 開催報告	新聞 秀一	16
令和 7 年度 SSSV プログラム参加学生へのご支援に対する 御礼とご報告（とお願い）	藤山 和仁	18
令和 7 年度 同窓会会計報告		24
令和 6 年度 同窓会会計報告の訂正		26
大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会「尚醸会」会則		28
同窓会現組織・会員の動向		30
●教職員の異動		
●会員訃報		
●令和 8 年 3 月卒業、修了生進路等		
●教室の構成		
●クラス会幹事		
名簿担当からのお知らせとお願い		36
会費納入方法についてのお知らせとお願い		37

巻頭言「AI 技術と共存するバイオテクノロジー」

兵庫県立大学名誉教授 根来誠司（昭和 52 年卒）

私は 1982 年に大学院博士後期課程を修了後、岡田研究室とその後継のト部研究室に在籍させていただきましたが、1998 年に姫路工業大学（現在の兵庫県立大学）に転出しました。これまで、尚醸会の活動には殆どお役に立てておらず、申し訳ない気持ちがありましたが、昨年、思いがけず、関先生から尚醸会の副会長を拝命いたしました。また、今回、原島・藤山両先生から巻頭言への寄稿を依頼されたこともあり、この機会に、表記の題目について、私が感じている内容をまとめて見たいと思います。

一昨年のノーベル化学賞受賞対象となったアルファフォールドによるタンパク質の立体構造予測は、私が最も感嘆した科学技術の一つです。特に驚いたのは、その予測精度の高さに加え、人工知能（AI）分野の研究、直接的には囲碁ソフト（アルファ碁）の延長線上のアイデアが原点になっているという点でした。私が阪大・助手の頃に、岡田先生が、「タンパク質のアミノ酸配列から立体構造を予測する技術が、生化学分野の最重要課題であるが、殆ど不可能に近い」という内容のお話をされていたのを思い出しました。当時は、物理化学的原理の積み重ねから構造を予測するというアプローチが大半であったと思います。しかし、タンパク質は、その構造の複雑さと自由度のため、部分的な構造予測は可能ですが、全体の構造については困難であるというのが当時の認識でした。

ブレイクスルーはしばしば、異分野との融合から生まれますが、アルファフォールドの開発は、岡田先生のお話から 40 年を経て、これが端的に具現化した事例であると思います。しかし、ここで重要なのは高精度の構造予測が、生化学者・構造生物科学者の努力の積み重ねで得た膨大な構造データを利用しているという点です。AI 将棋は、従来の棋譜を網羅的に検索して、次の一手を予測するそうです。アルファフォールドにおいても、構造類似性があるものについては、信頼度は高いのですが、新規タンパク質、複数タンパク質の会合体、タンパク質・リガンドとの複合体については、現時点では予測精度が不十分で、立体構造の実験的解析が不可欠であると思います。

AI・化学・バイオの協同による研究開発をもう一例紹介させていただきます。プラスチックは人類史上における画期的な発明であり、現代生活にとって欠くことのできない材料ですが、海洋投棄されたゴミのマイクロプラスチック化や、流出漁網によるゴーストギアのような海洋環境問題を引き起こしています。最近、伊藤特別教授（東大・工・応用化学）らのグループはナイロン-6/66 コポリマーからなる釣り糸が、海洋環境中で生分解を受けることを発見されました。この内容は新聞や NHK でも報道されたそうです。これを契機に、海洋生分解性プラスチックの開発に関する NEDO ムーンショットプロジェクトが実施されることになりました。

ナイロンオリゴマーの酵素分解は、私が 50 年前に岡田先生から卒研テーマとして与えられたものです。当時は、ナイロン工場の廃液処理に端を発した研究でしたが、同酵素の立体構造解析と機能改良、高分子ナイロンの酵素的モノマー化の研究を続けていたことが接点となり、現在、生分解性ナイロン開発に関する NEDO プロジェクトの外部アドバイザーを務めさせていただいています。AI を活用した合成ポリマーの分子設計と微生物・酵素の探索・改良という異分野の研究者が緊密にタッグを組み、化学企業も参画して研究が進められています。公表を控えるべき内容が含まれますので、詳細は紹介できませんが、AI 予想からは説明できない事例もでてきています。また、海

洋環境からも意外な微生物が得られるなど、まだまだ、説明できない事項も多く、発展の余地があると感じています。

医療面においては、今年 5 月 4 日の朝日新聞に、「AI が設計：菌を殺すウイルス」の題目で、医療への期待とリスクについての解説記事が掲載されていました。薬剤耐性菌への対応で医療面での新たな治療手段になり得ますが、一方、人間に感染する危険なウイルスを容易に創出することも可能になり、生物兵器へ悪用されるリスクがあるからです。このような恩恵とリスクが表裏一体のジレンマの中で、AI 技術の推進と規制をどのようにバランスを取っていくかという問題が提起されていました。

AI は、既存のデータから最適解を見いだす上で、極めて有効なツールで、バイオテクノロジーの中でも、特に、タンパク質工学を活用した分子設計、複数の酵素を統合的に利用する合成生物学の分野で威力を発揮すると思われます。実際、「合成生物学・バイオ」は政府の成長戦略の一つとして位置付けられています。上述したタンパク質構造予測においても、利用可能なデータベースの充実とプログラムの改良で、信頼性は高まるでしょう。しかし、全く革新的な概念の創出、新規酵素・微生物の探索は、AI と共存する時代では、今後一層、研究者自らが実践していくことが求められます。

従来の作業が AI に置き換えられつつあり、雇用が不安定化するなどの懸念も指摘されています。言い換えれば、同じ作業を AI と人間に競争させ、AI が優れていれば、AI 側に作業を委ねるという事態が現実化していることになります。例えば将棋・囲碁・チェスのように、予めルールが決められた世界では、AI が既存データを学習するとともに、有利になるでしょう。研究・技術についても同様で、「既成概念」を「相撲の土俵」に例えれば、土俵内の研究は既存技術の改良であり、単に従来のアプローチを踏襲して AI と競争すれば、淘汰される可能性が高いと思います。科学技術の分野では、倫理的に許容される範囲で、土俵の外側に出て勝負する必要がある、これが独創性の原点であり、技術的革新の源泉になるはずです。研究者個人の着眼点・価値観・感性・個性を活かし、新たな知見が得られれば、AI はこれを活用して新たな最適解を提示し、その結果、異なった展開も期待できます。AI の暴走を許さず、AI と共存する科学技術の発展を期待しています。

最後に、特に、若い研究者や学生の皆さんには、自分の現在のテーマについて短期的な成果にとらわれることなく、将来の新展開に繋がる潜在性・発展性を考えて研究に取り組んでいただくことを願っています。

教室の最近の動向

2026 年度 生物工学専攻専攻長
バイオテクノロジー学科目長
渡邊 肇

2026 年度の専攻長および学科目長を拝命いたしました渡邊肇です。当教室の昨年度から今年度にかけての近況をご報告申し上げます。

2026 年 3 月 31 日をもって、長年にわたり当教室の発展にご尽力いただいた福崎英一郎先生がご退職され、名誉教授とされました。この場をかりて篤くお礼申し上げます。福崎先生の後任として、原田和生先生が教授として着任され、生物資源工学領域を主宰されております。また、協力領域として産業科学研究所の山口哲志教授の研究室が「分子システム創成化学研究分野」として新たに加わりました。また、大政健史先生は、工学研究科長・工学部長に加えて新たに設置された執行役・副学長（学術研究機構長）にご就任されました。

現在、基幹講座には教授 7 名、准教授 7 名、助教 6 名が在籍しております。これに加え、生物工学国際交流センター（5 名）、情報科学研究科バイオ情報工学専攻（6 名）、蛋白質研究所蛋白質結晶学研究室（2 名）、および産業科学研究所（3 名）にも関連教員が在籍し、技術職員 1 名をはじめ多くの技術補佐員・事務補佐員とともに、学部および大学院の教育・研究に取り組んでおります。

学生の状況としては、この 3 月にバイオテクノロジー学科目から 62 名が卒業しました。また、生物工学専攻博士前期課程からは 52 名、博士後期課程からは 9 月に 2 名、3 月に 11 名が博士号を取得しました。さらに、本年 4 月には 2 年次の分属により 60 名がバイオテクノロジー学科目に配属されました。学校推薦型入試に加え、分属においても引き続き高い人気を維持しております。

大学院については、博士前期課程に 50 名（内部 46 名、外部 4 名）、博士後期課程に 6 名（内部 3 名、外部 3 名）が新たに入学・進学しております。現在は博士後期課程 78 名、博士前期課程 126 名、学部研究室配属学生 61 名が在籍しております。

また、工学研究科の特色の一つである共同研究講座も充実しており、現在 2 つの協働研究所と 5 つの共同研究講座が本専攻と連携しております。これらには特任教員 14 名、特任研究員 17 名が在籍しております。

さらに、本専攻の特色である国際交流も積極的に推進しており、昨年 10 月より「卓越した科学技術に立脚した産業バイオテクノロジー・グローバルリーダー育成プログラム」を開始し、留学生教育を展開しております。また、博士前期課程のダブルディグリープログラム（DPP）やタイへの短期留学も継続して実施しており、国際的に活躍できる高度人材の育成に努めております。

以上、昨年度から本年度にかけての動向をご報告申し上げます。同窓会の皆様におかれましては、今後とも当教室の運営にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

各研究室近況報告

【生物資源工学領域】（原田研）2026年3月に福崎英一郎先生が退職され、4月より原田和生先生が新たに教授となりました。学部生5名、修士12名、社会人博士1名、スタッフを合わせた合計21名で新しくスタートを切りました。また、福崎研から引き続き、乾隆子先生（クロスアポイント制度・特任教授）、古野正浩先生（招聘研究員）に参画頂き、研究を強力にサポート頂いております。これまで福崎研で行われてきた醗酵食品をはじめとする食品製造・加工工程をモニタリングする計測技術の開発をさらに深化させ、生命現象の解明と社会実装の実現の両方を目指しながら研究に取り組んでいます。加えて、薬学部や医学部と連携した研究テーマも立ち上がり、新しい研究室ならではの楽しい雰囲気には溢れています。お近くにお越しの際は、是非、新研究室にお立ち寄りください。

【生命環境システム工学領域】（渡邊研）2026年度の渡邊研は学部生5名、修士1年4名、修士2年8名、博士課程5名と3名のスタッフ（加藤准教授、Adhitama 助教）や招聘教授を合わせて合計27名のメンバーで研究を行っています。渡邊研の卒業生で昨年度までは本田研に在籍していたPijarReligiaさんも日本学術振興会のポスドクとして今年度から渡邊研に加わって活躍しています。また博士課程の5名は留学生でフィリピン、ブラジル、インドネシア、中国の出身です。また短期の受け入れとしては、カリフォルニア大学やチュラロンコン大学からの学生を受け入れています。私達の研究室のキーワードは生命と環境ですが、SDGsのこたばを借りるまでもなく、地球環境問題や化学物質問題は喫緊の課題となっており、スイス、スペイン、英国やベルギーなどの研究グループとも連携して研究を進めています。今後も積極的に研究を広げてまいりますので、今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

【高分子バイオテクノロジー領域】（内山研）2026年度の内山研は、鳥巢准教授、山口助教、特任教員・研究員、研究補佐、秘書、招へい研究員などのスタッフが34名、学生は、留学生や社会人学生も含め、博士後期15名、博士前期15名、学部生5名、の合計69名の研究室でスタートしています。研究対象は、バイオ医薬品、遺伝子治療用ウイルスベクター、食品です。ウイルスベクター製造はプラットフォームが完成し、培養、精製、分析、製剤、と一貫した研究が可能となり、病院との連携が深まっています。成果は継続して得られており、遺伝子治療関連の論文も高頻度で引用されるようになってきました。食品物性研究も順調に進み論文発表も行いました。国際的認知度が高まりスタッフ・学生共に国内外の学会での発表が着実に増加しています。より一層の科学技術基盤の充実に努めつつ、大学発の科学技術を社会に確実に還元できるように更に頑張ります。

【細胞工学領域】（關研）2025年5月に発足した關研究室は2年目を迎えました。2025年8月に前身の村中研究室卒業生の田村啓太さんが准教授として着任し、教授1名、准教授1名、スタッフ3名、学生18名の総勢23名で研究活動を行っています。研究対象としている植物のバリエーションが増え、引き続き、植物のユニークな代謝機能とその制御メカニズムの解明、およびバイオプロダクションへの応用を指向した研究プロジェクトを多数進めております。また、植物バイオテクノ

ロジーに関する新しい技術の導入にも積極的に取り組んでおります。研究室のウェブサイトも随時アップデートしておりますので、「**関研究室 阪大**」で検索してみてください。昨年も数名の卒業生が訪問してくれました。お近くにお越しの際は、ぜひお気軽に研究室へお立ち寄りください。

【**生物プロセスシステム工学領域**】（紀ノ岡研）本領域は、2009年に始まり17年目を迎えました。本年6月末現在、教員3名（紀ノ岡、金、山本）、特任教員・研究員などで56名、学生33名と、大所帯かつ国際的な研究室となっており、新たな学問体系「細胞製造性」を軸とし、社会実装に向けた産官学連携にて活動しております。細胞製造コトづくり拠点の活動としても、5つの共同研究講座と連携して、細胞製造に関するコトづくりを邁進しております。

【**生物化学工学領域**】（大政研）4月に新しく助教の Oghonna, Sochi（オボンナ ソチ）先生をお迎えしました。12年目は、大政教授、山野准教授、オボンナ助教、学部5、修士15、博士9、金井特任教員とスタッフで6か国45名です。HPも充実しています（<https://biochemicalengineering.jp/>）。大政先生は、引き続き、工学研究科長・工学部長に加えて、新設された執行役・副学長（学術研究機構長）として大学の運営全般に携わり、Asian Federation of Biotechnology (AFOB) 会長、次世代バイオ医薬品製造技術研究組合（MAB）組合理事・PLも務めています。遺伝子治療製造PJ（PL大政）、NEDO、科研基盤A（大政）、科研基盤B（山野）と研究PJも充実しています。山野先生は第9回バイオインダストリー奨励賞を受賞されました。学生も国内外5件の発表賞を受賞しています。近くにお越しの際は是非お立ち寄り下さい。

【**微生物機能工学領域**】（青木研）当領域は2023年4月に新たに設置され、設立4年目を迎えました。2026年度は、新たに4回生5名、研究員4名を迎えました。その結果、スタッフ4名、博士後期2名、博士前期14名、4回生5名、研究員7名の総勢32名となりました。当研究室では、微生物学・合成生物学・オミックス科学の枠組みを拡張し、微生物が持つ極めて多様な機能を分析・再構成・応用することで、食を始めとしたさまざまな産業の課題を解決していきたいと考えています。特に近年は、遺伝コード拡張による特殊ペプチド・タンパク質の合成に力点をおいて研究に取り組んでいます。次世代を担う人材の育成と、微生物を起点とした革新的バイオテクノロジーの創出に向けて努力して参りますので、今後とも皆様のご支援を賜れますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

【**バイオ情報計測学講座**】（松田研）バイオ情報計測学講座は2018年度から活動を開始し、2026年の4月には6期生がいろいろありつつも無事に卒業しました。2026年の4月には応生出身、当研究室の第2期生の谷口超夫先生が助教として着任し、教授：松田史生、准教授：岡橋伸幸と2名の布陣で応生の学部教育を担当しております。2026年度は学部生5名を迎え、修士7名、博士2名、スタッフ8名の計22名（6月現在）でバイオテクノロジーを基盤に生物、計測、情報を融合した研究を活発に進めてまいります。応生出身、当研究室の第2期生の谷口超夫君は学位取得後この4月からひきつづき特任助教として研究室の発展に貢献してくれることとなりました。また、2026年5月には皆でボーリングに行っかなり低い点数ではあるものの結束を固めるなど、今年度も一

層仲良く、日々の研究を続けてまいります。

【代謝情報工学講座】（清水研）令和8年度は学部生5名、修士9名、博士3名、スタッフ8名の合計25名の体制となり、情報科学と生物工学を融合する代謝工学研究を精力的に推進しております。昨年度は、第77回日本生物工学会大会に多数参加し研究発表を行いました。科学研究費補助金の研究、JSTの各種プロジェクトなど精力的に推進中です。次世代のバイオテクノロジー分野を牽引する人材の育成とバイオモノづくりに資する代謝工学研究の創出を目指し、研究室一丸となって取り組んでおります。今後とも皆様の温かいご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

【応用微生物学領域】（藤山研）本年度、私たちの研究室は、学部4回生5名、修士課程11名、博士課程11名、技術補佐員1名、スタッフ3名の計31名で活動しています。今年も変わらず国際色豊かなメンバーが集い、日本人学生を含む5か国からの学生たちが、明るく和やかな雰囲気の中、力を合わせて研究に励んでいます。また、短期留学生の受け入れや海外研究機関との交流にも積極的に取り組み、多様な文化や研究背景を持つ学生・研究者が互いに刺激し合える環境づくりを推進しています。国際交流は私たちの研究室の重要な活動の一つであり、研究と人材育成の両面から、そのさらなる発展に力を注いでいます。さらに、本年度は藤山教授の定年退職を迎える節目の年でもあります。研究室一同、これまで築き上げられてきた研究の集大成となる成果を目指し、それぞれの研究テーマに全力で取り組んでいます。研究室での日々の様子やちょっとした出来事は、「藤山研通信」で随時発信していますので、ぜひご覧ください。近くにお越しの際には、どうぞお気軽にラボへお立ち寄りください。メンバー一同、みなさまとお会いできることを楽しみにしています。

【分子微生物学領域】（本田研）2026年度の本田研究室は、本田教授、富田准教授に加え、7名のスタッフ、19名の大学院生、6名の学部生の計34名でスタートしました（2026年4月1日時点）。このうち、ベトナム、フィリピン、モンゴル、中国、インドネシア、アメリカ出身の外国籍メンバーが7名在籍しており、さらにタイやドイツなどからの短期留学生や外国人招へい教員も頻繁に訪れるなど、多様性に富んだ環境で教育・研究を実施しています。研究室では、微生物機能を活用した持続可能なものづくりを主要なテーマとして掲げ、国内外の研究機関と幅広く共同研究を展開しています。本田教授が代表を務めるJST GteX事業（バイオものづくり領域・微生物中核チーム）は、5年間の事業期間の折り返しを迎え、研究成果の創出と社会実装に向けた活動が一層活発化しています。

【蛋白質結晶学研究室】（栗栖研）昨年1年間も、タイ・ウィタヤシリメティー科学技術大学院大学、タイ・スラナリー工科大学、ドイツ・ルール大学からの共同研究者が複数滞在されて、研究室は相変わらず国際色豊かな状況でした。今年の3月31日付で研究室の特任助教の小手石先生が退職されて、4月1日付でJSPSの特別研究員PDであった関荘一郎さんが特任助教に採用されました。新しく配属された2名の卒研生と一緒に今年一年頑張っていきたいと思います。3月末には私どもが管理する新しい電子顕微鏡も導入されて、改めてオリジナリティの高い大阪大学発の研究を発信していきたいと考えております。引き続きのご支援をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

【分子システム創成化学研究室】(山口研) 当研究室は 2024 年に産業科学研究所に発足した研究室であり、山口哲志教授が日本生物工学会と化学工学会で活動している関係で、本年度 4 月から協力講座に加えて頂きました。現在は、工学部からの学部 4 回生 3 名を含む学部生 5 名、修士課程 7 名、博士課程 3 名、スタッフ 7 名の計 22 名で活動しています。我々は、有機合成化学を基盤として、生体分子や細胞を操る分子や、生命システムを可視化する分子を開発し、医療やバイオ産業の課題解決につながる新技術の創出を目指した研究を行っています。6 月には、山平真也助教が准教授に昇任し、朱浩助教、二木特任助教とともに、研究教育活動に従事しております。また、今年から山田杯ソフトボール大会にも参加させて頂き、スタッフと学生が一緒になって楽しく活動しております。どうぞ宜しくお願いします。

【麹菌育種工学寄附講座】当寄附講座は公益財団法人発酵研究所からの寄附講座助成により、2021 年 10 月に発足しました。今年是最終年度の 5 年目の運営となり、麹菌の株によるゲノム情報の多様性と共通性について野外由来類縁菌も含めた実験データを蓄積しています。寄附講座准教授：酒井、特任教授：楠本、招へい教授：石田（月桂冠株式会社）、招へい准教授：眞岸（ヒガシマル醤油株式会社）の体制で研究を進めています。寄附講座運営責任者は 4 月から酒井が担当しています。12 月には寄附講座の成果報告シンポジウムを開催予定で準備を進めております。また、企業や大学、国立・公設研究機関との共同研究を実施中です。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

【Global Food and Agri-tech Laboratory】As of FY2026, the Sastia Putri Laboratory has 13 members: 4 master's students and 9 doctoral students, from Japan, Indonesia, and the Philippines. A PhD student Ms. Mary Faith Yamballa Adan received the SBJ Student Excellence Award 2025 for her outstanding research presentation. Associate Professor Sastia Prama Putri was invited as a keynote speaker at the 2026 Korea Metabolomics Society Annual Symposium in Seoul and the 2nd Conference of Metabolomics for Health (CMH2026) in Shanghai. She is also scheduled to speak at Metabolomics 2026 (22nd International Conference of the Metabolomics Society) in Buenos Aires this June. She was also awarded the Tatler Asia Front & Female Awards Indonesia 2026 in the Innovation category. Additionally, she was featured in the "Women of Metabolomics" section of Metabolomics (Vol. 22, No. 1/2, 2026), the official journal of the Metabolomics Society, as one of the female leaders in the metabolomics field. The lab received the Academic Research Grant from the Kato Ikuei Foundation (一般財団法人 加藤育英基金), supporting research on sago as a sustainable staple food through metabolomics. In April 2026, the lab welcomed visits from the Brawijaya Innovation Center for Genomics (BRAVOGEN), Universitas Brawijaya, and PT Paragon Technology and Innovation, strengthening ties with both academic and industry partners. We look forward to further growth and welcome any visits to our lab! For more information, please visit: sastialab.wixsite.com/home.

教員紹介：生物工学専攻細胞工学領域教授就任のご挨拶

大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻 關 光

2025年5月1日付けで、生物工学専攻・細胞工学研究室の教授に就任いたしました、關 光（せき ひかる）と申します。2025年3月に村中俊哉 教授（現、名誉教授）が定年退職された後、同研究室を主宰しております。

私は、2011年4月に村中教授が主宰される細胞工学研究室に准教授として着任いたしました。着任当初は、それまで専任教員としての経験がなかったため、多くの課題に直面しておりました。しかしながら、村中教授をはじめとする教職員の皆様から絶え間ないご支援を賜りながら、何とか准教授の職務を全うすることができました。改めて、専攻の皆様に深く感謝申し上げます。

私は、岡山大学農学部において植物病理学・植物遺伝子工学の分野で研究を開始して以来、一貫して植物を研究対象としてまいりました。岡山大学で学位を取得した後、マックスプランク植物育種学研究所、理化学研究所植物科学研究センター、横浜市立大学木原生物学研究所を経て大阪大学に着任し、特に漢方原料植物が生産する薬理成分の合成酵素遺伝子の探索や代謝工学研究を行ってまいりました。植物を対象とする研究は、時に結果が得られるまでに長い時間を要する地道な作業が多いのですが、たくさんの学生さんたちの地道な努力があってこそ、これまで進めてこられたと思います。同時に、2011年に准教授として着任した当初は全くできなかったさまざまなことが、技術的に可能になってきました。特に大きいのは、これまで植物では極めて難しかった「狙った遺伝子にピンポイントで変異を導入できる」ゲノム編集技術を植物の育種に利用できるようになったことです。そこで近年では、ゲノム編集技術を使って薬用植物の薬用成分含量を高めたり、作物の耐病性を高める研究などに注力しています。

昨年5月に細胞工学研究室の教授に就任した際、教員は私一人のみでしたが、同年8月にはゲノム解析の専門家であり、同研究室の卒業生でもある田村啓太 博士が准教授として着任し、一緒に新たな研究室を立ち上げているところです。今後は、これまでの研究で得られた研究成果の社会実装に取り組むとともに、新しい研究分野にもチャレンジして「社会に役立つものづくり」のマインドが深く根付く本専攻の研究の多様性と魅力を広く社会や大学受験生にアピールするとともに、今後の植物バイオテクノロジー研究を牽引する国内外の次世代研究者育成に貢献していきたいと思います。

尚醸会の諸先輩方におかれましては、引き続きご指導、ご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。



教員紹介：生物資源工学領域教授着任のご挨拶

生物資源工学領域 原田和生（平成 14 年卒）

2026 年 4 月 1 日付で生物資源工学領域の教授に着任いたしました。私は 1998 年に本学工学部応用自然科学科に入学し、2001 年に小林昭雄教授主宰の細胞工学領域に配属されました。福崎英一郎先生、梶山慎一郎先生、岡澤敦司先生のご指導のもと天然物化学および分析化学の基礎を学び、博士前期・後期課程ではポスドクだった馬場健史先生、学生だった和泉自泰先生とともに当時黎明期にあったメタボローム解析の基礎技術開発に取り組みました。その後、福崎先生の生物資源工学領域教授就任に伴い領域を移り、博士学位を取得いたしました。

2008 年 4 月には大阪大学大学院薬学研究科、平田収正教授の研究室に助教として着任し、ケミカルプロフィールを活用した生薬・漢方薬の品質評価研究に従事しました。また、医学系研究科保健学専攻、山本容正教授が代表を務めた SATREPS プロジェクトに参画し、ベトナムにおける食品および環境中の抗菌性物質残留の実態解明に取り組みました。現地研究者や関係機関との継続的な連携を通じて研究成果を積み重ね、論文発表や行政当局への施策提言につなげることができました。2017 年には医学系研究科法医学教室に異動し、薬毒物検査の技術開発、中毒症例の解析、薬毒物体内動態シミュレーションなどの研究に従事しました。法医解剖の実務にも携わる中で、様々な方の不幸な死を目にし、我々アカデミアが人や社会に果たす役割について深く考える貴重な経験を得ました。また、生物工学若手研究者の集い（若手会）の運営にも携わり、大政健史先生のご指導を頂きながら、青木航先生や岡橋伸幸先生、山口哲志先生など多くの先生方や研究者の皆様との交流を通じて、多くを学ばせていただきました。

このたび学生時代を過ごした専攻・研究室に教授として戻る機会をいただきましたことを、大変光栄に感じております。今後は、醗酵をはじめとする食品製造・加工プロセスにおける高度計測技術の開発を中心に、食品・醗酵工学分野の発展に貢献してまいりたいと考えております。また、これまで工学、薬学、医学の各分野で培った経験を活かし、人々の健康増進に資する分析技術や、死因究明・救命救急に資する薬毒物検査技術の開発にも取り組んでいきたいと考えております。

教育面においては、次世代を担う学生や若手研究者の育成にも力を注ぎ、研究面においては学際的な連携を推進しながら、知の創出と社会実装を目指してまいります。研究、教育、国際交流、組織運営を通じて、生物工学および社会に貢献できるよう努めてまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



教員紹介：協力講座新設のご挨拶

産業科学研究所 山口 哲志

2026 年 4 月 1 日付けで、研究室を協力講座にして頂きました山口哲志（やまぐち さとし）と申します。私は 2024 年に産業科学研究所（産研）の分子システム創成化学研究分野に教授として着任し、青木航先生や大政健史先生をはじめとした研究活動上つながりのある先生方のご推薦で、協力講座にして頂きました。素晴らしい歴史のある本専攻の研究教育活動に加わせて頂き、心より感謝するとともに大きな責任も感じております。

私は東京大学工学系研究科の長棟輝行教授のご指導の下、タンパク質のリフォールディング技術に関する研究で学位を取得しました。その際に、タンパク質の凝集を抑制する添加剤を自ら設計・合成したいと思い、有機合成化学の研究室に 4 年間出向し、化学合成の手技を身に付けました。学位取得後、ケミカルバイオロジーの研究室でポスドクをした後、古巣の長棟研に助教として戻り、その後、東大の合成化学系の研究室で 10 年以上講師・准教授として奉職しました。このような経歴の中で、化学合成によって創出した分子ツール（合成分子から成る道具）を用いて、細胞の機能を制御・解析する技術の開発を行ってきました。現在、開発した技術を用いて、シングルセル解析による生命現象の理解や、がん治療用免疫細胞の機能改善と品質管理、有用物質生産のための高機能性細胞の探索などに資する新しいシステムの創成を行っております。

私は、大阪の豊中市で生まれ、高校まで阪大の近くで育ちました。また、長棟先生のご友人であった中嶋幹男先生に誘われて、学部 4 年生の時に関達治先生の研究室で初めて外部発表をさせて頂いたり、修士 1 年で初めて参加した学会（2000 年生物工学会）の懇親会で初めてお声かけ下さった先生が紀ノ岡正博先生であったり、東大で初めて指導した学生が大竹久夫先生の研究室の出身者であったり、と本専攻とは昔から何かと繋がりを感じてきました。また、生物工学会と化学工学会バイオ部会で長く活動していますので、多くの卒業生の方々と様々な場で交流させて頂いてきました。ですので、約 30 年ぶりに大阪に住んで、生物工学国際交流センターの建物の横を通して生物工学専攻のお仕事に参加していると、不思議な運命を感じます。

これから配属して頂いた学生さん達と一緒に、生物工学の新しい学術領域を開拓するような研究を行っていきたいと考えております。その中で、産学で活躍できる次世代の優れた研究者を輩出していく所存です。尚醸会の諸先輩方におかれましては、我々の活動および卒業生のキャリアに対し、ご指導、ご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。



近況報告：大阪大学での新たなスタート

大阪大学大学院医学系研究科 馬場 健史（平成 13 年博士後期課程単位取得退学、元教員）

2026 年 4 月 1 日より、大阪大学大学院医学系研究科システム代謝学の教授として着任いたしました、馬場健史（ばんばたけし）でございます。工学研究科、薬学研究科でお世話になった大阪大学に、こうして改めてご縁をいただき、懐かしさとともに大きな責任感を持ちながら日々研究・教育に取り組んでおります。

私の研究歴を少しご紹介させていただきますと、岡山大学大学院農学研究科を修了後、企業研究員を経て大阪大学大学院工学研究科博士後期課程に進み、小林昭雄先生の研究室で天然物化学、植物代謝工学の研究に取り組みました。2001 年に博士（工学）を取得、その後は 2006 年から大阪大学大学院薬学研究科の平田収正先生の研究室で助手・助教を務め、そして 2008 年に工学研究科に戻ってまいりまして福崎英一郎先生の研究室で准教授を務めさせていただき、2015 年から九州大学生体防御医学研究所の教授として研究を発展させてまいりました。

私がこれまで主軸として取り組んできたのは、代謝物を包括的に解析する「メタボロミクス」の技術開発です。とりわけ超臨界流体クロマトグラフィー（SFC）を質量分析と組み合わせた手法の開発に力を入れてきました。SFC は従来の液体クロマトグラフィーでは難しかった脂質類の高速・高精度分析を可能にする技術であり、この分野でいち早く取り組んだことで国際的にも評価をいただけてきました。また、島津製作所との産学連携で超臨界流体抽出もオンラインで可能な分析スケールの新たな SFC の装置を開発し上市しました。令和 6 年度には、文部科学大臣表彰（科学技術賞・研究部門）、令和 7 年には井上春成賞を受賞させていただき、研究の社会的認知も高まりつつあることを実感しております。

医学系研究科への着任を機に、これまで磨いてきた「測る」技術を「治す」へとつなぐトランスレーショナル研究を本格的に推進していきたいと考えております。メタボロミクスを駆使した疾患バイオマーカーの探索と病態解明、ゲノミクスやプロテオミクスとの統合オミクス解析など、基礎医学から臨床、さらには産業応用まで幅広く研究を展開する計画です。様々な代謝疾患の理解と新たな診断・治療法の開発に、微力ながら貢献できればと思っています。

尚醸会の皆様のご縁に感謝しつつ、これからも研究教育に全力で取り組んで参る所存でございますので、何卒ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



近況報告：阪大から東工大、そして東京科学大学へ

東京科学大学 生命理工学院 平沢 敬（元教員）

2007年4月から2013年8月まで、情報科学研究科バイオ情報工学専攻の清水浩教授の研究室において助教を務めておりました平沢敬と申します。それ以前は、2002年4月から約3年間、工学研究科応用生物工学専攻（当時）の塩谷捨明教授の研究室にて、博士研究員として研究に従事しておりました。

私は、2013年9月に東京工業大学大学院生命理工学研究科生物プロセス専攻の准教授に着任いたしました。その後の組織改編に伴い、所属は生命理工学院生命理工学系へと変わりました。さらに、2024年10月には東京工業大学と東京医科歯科大学の統合によって「東京科学大学（Institute of Science Tokyo）」が発足しましたが、現在も同学院に所属して研究・教育に励んでおります。阪大から異動して気がつけば10年以上が経ち、月日の流れの速さを実感する日々です。

私の研究室は、一昨年（2024年）9月に日本生物工学会大会が開催された都内の大岡山キャンパスではなく、そこから電車で1時間ほどに位置する横浜キャンパス（旧 ずずかけ台キャンパス）にあります。学生時代から一貫して微生物を対象に、基礎から応用に至る研究を行ってまいりましたが、その向き合い方は今も変わりません。現在は大腸菌やコリネ型細菌、出芽酵母を主な対象とし、研究室に所属する14名の学生たちと議論を重ねながら、微生物の力を活用した有用物質生産や代謝工学に関する研究を展開しています。

また、塩谷先生・清水先生の研究室に大学院生として在籍されていた白井智量さん（現・理化学研究所 環境資源科学研究センター バイオものづくりデザイン研究チーム チームディレクター）からお声がけいただき、微生物を用いた有用物質生産に関する共同研究を現在も続けさせていただいております。教育面においては、阪大での経験があるからか、微生物学のみならず生物化学工学の講義も担当するようになりました。また、阪大在職当時に四方哲也教授の研究室におられた松浦友亮先生が、その後こちらの地球生命研究所の教授に着任され、現在は学生実験を共に担当する間柄となりました。当時培ったさまざまな縁が、形を変えて今なお続いていることに深く感謝しております。

東京科学大学は今年、『科学の進歩』と『人々の幸せ』とを探究し、社会とともに新たな価値を創造する』をミッションに掲げ、国際卓越研究大学に認定されました。現在、研究・教育に関するさまざまな改革が急ピッチで進められています。正直なところ、私自身も具体的な中身をフォローしきれていない部分もあるのですが、官産学連携や国際連携において、これまで以上に貢献することが求められているとひしひしと感じています。

大学を取り巻く環境は大きく変化しておりますが、今後も学生たちとともに地道に研究・教育に向き合ってまいります。お近くにお立ち寄りの際は、ぜひ横浜キャンパスの研究室にも足をお運びください。皆様と懐かしいお話ができる日を心より楽しみにしております。

令和7年度尚醸賞の授与

工学部バイオテクノロジーコースの成績優秀者の努力を讃え、2026年3月25日にサントリーメモリアルホールにて、尚醸会を代表して当時の会長の関先生より尚醸賞が授与されました。受賞者の皆様の今後の益々のご活躍を期待しています。

尚醸賞受賞者のコメント

久保 夏実さん

この度は尚醸賞を頂き、誠にありがとうございます。先生方や家族に支えられ、友人と切磋琢磨しながら、4年間地道に努力を重ねてまいりました。その結果、このような形で表彰していただけたことを大変嬉しく思っております。今後も周囲の方々への感謝の気持ちを忘れることなく、日々精進してまいります。

山岡 咲季さん

この度は尚醸賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。大学4年間、親身にご指導くださった先生方やかけがえのない友人、そして家族に支えられながら努力を重ねて参りました。その成果をこのような形で評価していただき、大変光栄に存じます。今後もこの賞に恥じぬよう、より一層精進して参ります。

島地 萌香さん

この度は尚醸賞を賜り、誠に光栄に存じます。大学4年間、先生方や先輩方、友人、そして家族の支えの下で積み重ねてきた努力を、このような形で評価していただけたことは大きな喜びであり、これからの励みとなります。支えてくださる周囲の方々への感謝を忘れず、今後もより一層精進してまいります。



左から久保 夏実さん、関 達治会長、島地 萌香さん、山岡 咲季さん

令和7年度工学賞を受賞して

大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻

原田研究室 博士前期課程1年 久保夏実（令和8年卒）

この度は、令和7年度大阪大学工学賞を頂けたことを誠に嬉しく思っております。このような大変名誉ある賞を頂けたのは、ご指導いただいた先生方や先輩方、共に切磋琢磨しながら学び合った友人、そして精神的、経済的な面を含め常に支えてくれた家族など、これまで関わってくださった多くの方々のお力添えのおかげであり、心より感謝申し上げます。そのような皆様への感謝の気持ちを決して忘れることなく、これからも日々精進していく所存でございます。現在私は、原田教授の温かいご指導のもと、固体培養における製麺工程の科学的なモニタリング手法の確立を目指し、揮発性有機化合物（VOC）に着目した研究に取り組んでおります。本研究は、発酵食品の品質を支える麺作りの過程を、従来の職人による経験的評価から科学的に捉え直すことを目的としており、現在はその基盤となる実験設計に日々試行錯誤している段階です。また、本年度から発足した研究室で、新たな研究テーマを設定する中で、研究の進め方そのものを一から学んでいるところでもあります。研究室に配属されてから一年が経ちましたが、答えのない問題に自分なりの考察をもって取り組むという研究の難しさを日々感じております。しかし、昨年度末に定年退職されました福岡教授をはじめ、これまでご指導いただいた先生方や先輩方から、実験計画の立て方や考察の進め方について多くの助言をいただき、その一つ一つが現在の研究活動を支える大きな力となっております。そのおかげで、未熟ではありますが、そのサイクルを自分で回すことができるようになってきていると実感しております。今後は、思考力や発想力、そして自分の考えをわかりやすく伝える力など、研究者として必要な能力をさらに磨きながら、研究に一層真摯に取り組んでいく所存です。そして、これまで支えてくださった多くの方々への感謝の気持ちを常に胸に刻み、今後の大学院生活においても日々精進してまいります。周囲の皆様におかれましてはこれからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

令和 7 年度 尚醸会バイオテクノロジーセミナー報告

庶務幹事 梶浦 裕之 (H15 年卒)

令和 7 年 11 月 8 日、尚醸会総会ならびにバイオテクノロジーセミナーが、大阪大学吹田キャンパス・サントリーメモリアルホールにて、対面と Web 配信を併用したハイブリッド形式にて開催され、同窓生 46 名にご参集いただきました。

総会では、関達治会長 (S42 卒) よりご挨拶を賜り、藤山和仁幹事長 (S59 卒) より令和 6~7 年度事業報告が、紀ノ岡正博バイオテクノロジーコース長 (現教員) より同コースの現況報告がなされました。続いて幹事長、編集委員、財務担当幹事より会報誌に係る令和 6 年度会計報告の修正点と今後の対応策が示されました。その後、光島健二監査役 (S47 年卒) による会計監査承認が行われました。協議事項としては、現在使用中の通帳の口座名変更について審議のうえ承認されたほか、関達治会長の令和 7 年度をもってのご退任、ならびにこれに伴う原島俊副会長 (S47 卒) の令和 8 年度会長就任についても審議され、いずれも滞りなく承認されるに至りました。

引き続き催されましたバイオテクノロジーセミナーでは、2 名の同窓生を講師にお迎えいたしました。藤井健治 様 (H17 卒) には「デンカ (株) のライフサイエンスへのアプローチの変遷とその中での私の取組み」と題し、ご入社以来今日に至るまでのお仕事の変遷と、そこに込められた歩みの数々をご披露いただきました。お二人目には平田善彦 様 (H9 卒) より「いのちをつなぐ挑戦—サラヤが描く、洗浄の未来と海洋保全」と題し、サラヤ株式会社が世界規模で展開する取り組みの数々、そして大阪・関西万博出展に懸ける想いをお話しいただきました。いずれのご講演も示唆に富み、気づけば持ち時間があっという間に終わってしまった、そんなひとときでした。



藤井健治 様



平田善彦 様



集合写真

セミナー終了後は、大学構内の KitchenBISYOKU へ場所を移し、交流会が催されました。杯を傾けながらの歓談のひとときは尽きることなく、旧交を温め合う和やかな時間となりました。

今年度も、皆様にお目にかかれますことを心よりお待ち申し上げます。

令和7年度尚醸会企画OB・OG懇談会開催報告

生物工学 新聞秀一（現教員）

【イベント名】

令和7年度尚醸会OB・OG交流会

【開催日時】

2025年9月19日（金）17:00~21:00

【会場】

大阪大学吹田キャンパス生物工学国際交流センターβ棟3Fセミナー室

【参加人数】

14名

【懇親会会費】

2000円（OB・OGは招待としました）

【次第】

開会の挨拶（企画幹事：新聞秀一）

OB・OG講演

1. 石本梓穂（株式会社島津製作所）「社会人1年目のリアル：大学院生から何が変わった？」
2. 松永光平（株式会社社住友科学）「化学メーカーでの薬物動態・安全性研究」
3. 田村啓太（現教員 關研）「民間企業とアカデミアの両方を経験して」

質疑応答

懇親会（18:30～21:00）

【講演内容概要】

令和7年度のOB・OG懇談会も、令和6年度に引き続きハイブリッド形式の講演会と対面での懇親会を開催しました。

現在民間企業に勤めているOB・OGからは、学生時代の過ごし方や企業における仕事の内容ならびに現在のワークライフバランスなどが紹介されました。株式会社島津製作所の石本様からは出張前の時間を縫って懇談会に参加していただきました。全ての演者の皆様には、講演の中で「ワークライフバランス」について取り上げていただきました。

【懇親会の様子】

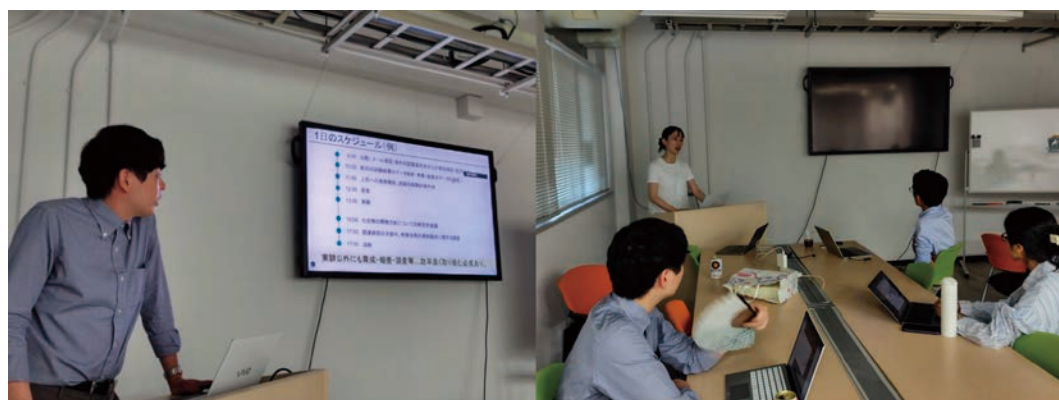
休憩を挟んで行われた懇親会では、OB・OG・現役学生の垣根を越えて、和やかな雰囲気の中で懇談が行われました。食事を交えながら、進路選択に関する相談や先輩方からの生き生きとした体

験談など、非常に有意義な交流が行われました。

【総評】

当初の目的通り、OB・OGと現役学生の相互理解を深め、進路選択の一助とすることができたと考えています。懇親会中も終始活発な意見交換が行われ、大変有意義なイベントになりました。参加者一同、実り多い一日となりました。その一方で、開催時期については再考するべきであると考えております。例年、9月の最終金曜日に開催しておりましたが、令和7年度は9月中旬の開催となりました。夏休みの最中であることから、学生の参加率が例年と比べて非常に悪かったように思います。ご多用中にもかかわらず、講演を引き受けてくださったOB・OGの皆様と交流できる貴重な場ですので、令和8年度は開催時期についてよく考えたいと思います。ご支援のほどよろしくお願いいたします。

本OB・OG懇談会を開催するにあたり、尚釀会より1000円/人の補助を懇親会費としていただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。



尚釀会 OB・OG 交流会のスナップショット

令和7年度 Short-stay Short-visit (SSSV) プログラム参加学生へのご支援に対する御礼とご報告（とお願い）

生物工学国際交流センター 藤山和仁（昭和 59 卒）

生物工学専攻の協力部局である生物工学国際交流センターは 2011 年度より、日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度を利用した交換留学プログラムである Short-stay Short-visit（SSSV）プログラムを実施しています。このうち、送り出しプログラムでは、工学研究科の大学院生に対して応募をかけ、選抜した大学院生（すべて、生物工学専攻）を、タイのトップ大学 4 校（マヒドン大学、チュラロンコン大学、カセサート大学、モンクット王工科大学トンプリ校（KMUTT））に派遣し、約 5 週間の在外研究に取組みます。派遣先であるタイの 4 大学の研究室の主宰者には、本専攻やその前身となる学科・専攻を修了した元留学生も多く、SSSV はこうした先生方の協力のもと運営されています。2025 年度は、藤山研 4 名、本田研 3 名、福崎研 4 名、内山研 3 名、大政研 2 名、の 16 名がプログラムに参加し、配属先大学での在外研究のほか、タイ語・タイ文化に関するオリエンテーション、タイ味の素アユタヤ工場の見学、タイ国立科学技術開発庁（NSTDA）の傘下にあるタイ遺伝子工学バイオテクノロジーセンター（BIOTEC）の訪問など様々なアクティビティに取り組みました。これまでに生物工学専攻（生命先端工学専攻・生物工学コースを含む）から 250 名近い大学院生が SSSV プログラムに参加しており、本専攻の重要な国際交流プログラムです（<https://www.icb.osaka-u.ac.jp/on-going-2/>）。昨今の円安に伴う航空運賃の高騰や、感染症対策のための宿泊費、より充実した海外旅行保険への加入など、参加学生の経済的負担は増大しておりますが、同窓会組織である尚醸会からは多大なるご支援を賜りました。2023 年度には総額 360,000 円のご支援をいただき、派遣学生の約 8 割が感染症に見舞われるという非常事態においても、手厚い保険のおかげで全員が無事にプログラムを完遂することができました。続く 2024 年度は 408,000 円を戴きました。2025 年度は 272,000 円のご支援により、体調不良を訴えた学生も十分な医療を受けることができ、全員が元気に帰国を果たしております。参加学生一同、昨年 11 月の尚醸会バイオテクノロジーセミナー交流会にて直接感謝を述べさせていただきましたが、この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。本稿のおわりに 2025 年度 SSSV プログラムに参加した学生の手記を掲載いたします。

最後に、これまでに SSSV プログラムに参加された卒業生の皆様へお願いです。生物工学国際交流センターでは、2014 年度より「バイオテクノロジー教育促進事業」を立ち上げ、SSSV プログラムをはじめとした学生支援活動のさらなる充実に努めています（<https://www.miraikikin.osaka-u.ac.jp/project/icb>）。SSSV プログラムを通じて皆様が得た体験や思い出を、より多くの後輩たちにも経験していただけるよう本事業への温かいご支援を賜れますようお願い申し上げます。



2025 年度 SSSV プログラムの様子（日系タイ企業の工場見学の集合写真）



2025 年度 SSSV プログラムの様子（最終成果報告会後の集合写真、タイ・マヒドン大理学部）

①大政研 伊藤 有紗 チュラロンコン大学

私は EED と呼ばれるタンパク質をノックアウトしたマクロファージの不死化と機能解析に取り組みました。現地の研究員や大学院生の方々と協力しながら実験計画を立て、初めて扱う手法にも挑戦することで、多様な実験技術を経験することができました。日々のディスカッションや助言、日本での研究テーマに関する質問など意見交換を通じて多角的な視点や新たな考え方を得られたことは大きな収穫でした。また、習得した手技や思考プロセスは自身の研究にも応用可能であり、今後の研究活動に大きく役立つと感じています。

②本田研 速水 彩乃 チュラロンコン大学

今回の一か月間のタイ留学を通して、研究技術を深めるだけでなく、英語でのコミュニケーションに対する姿勢を見直す大きな機会となった。PHA の生産からそれを使用して、ナノ粒子を作製するという研究活動や現地の学生との交流の中では、受け身ではなく積極的に自ら行動することの重要性を実感し、それが自身の成長につながったと感じている。さらに、タイの学生や異なる専門分野の先生方との議論を通じて、多角的な視点を身につけることができたことも大きな収穫であった。研究だけでなく、食文化や日常生活に触れることで、日本とは異なる価値観に直接触れることができ、多様な考え方にあふれる社会で自分にとっての「良い選択」とは何かを改めて考える契機ともなった。この経験で得た学びを、今後の研究活動や人生の基盤として生かしていきたい。

③内山研 出口 皓喜 チュラロンコン大学

私はチュラロンコン大学で、SHRV ウイルスの感染をファビピラビルで阻害できるか確かめる研究をしました。普段の研究でウイルスを扱っていましたが、感染実験や細胞生存率の測定などの経験はありませんでした。この研究活動を通してウイルス学におけるスタンダードな研究手法を身につけることができました。

④内山研 山崎 真奈 チュラロンコン大学

私は、フタル酸エステル分解と植物成長促進の両機能をもつ細菌の評価研究に取り組み、先生方からのご指導やミーティングを通じて多くの知見とデータ解析力を養いました。また、現地の風習や食文化に触れ、交流を通して異文化理解を深めることができました。積極的に行動する中で自身の成長を実感し、大きな意義を感じています。今後はこの経験を糧に、生活をより有意義なものにしていきたいと思います。

⑤福岡研 西川 真翔 チュラロンコン大学

今回の SSSV プログラムでは、異なる言語や文化、価値観に長期間触れることができ、非常に有意義な時間となりました。これまでは留学生を受け入れる立場でしたが、今回は留学生としての立場を経験したことで、自身のこれまでの対応を見つめ直す良い機会となりました。研究では、コメの種子に微生物を添加して発芽を促進させることを目的に実験を進めました。実験の過程では、TA の方にご指導いただきながら、微生物を扱う際に必要な操作や知識を深めることができました。日本での今後の研究でも微生物を扱う可能性があるため、今回の経験を通じて微生物学を学べたことは大変有意義でした。

⑥福崎研 藤川 栞佑 キングモックト王工科大学トンブリ校 (KMUTT)

KMUTTにて μ PADs (マイクロ流体デバイス)を用いたDNA検出デバイスの研究に従事した。具体的には、紙基材の表面改質や親水性制御を行い、試料の非特異吸着を抑制する条件を検討した。また、試薬のデザインやデバイスへの滴下方法を工夫し、DNAの検出効率を最大化する実験を繰り返した。普段の質量分析による食品成分解析とは異なり、材料工学や表面化学の知見を組み合わせる必要があり、異なる視点から課題解決に取り組む貴重な経験となった。

⑦本田研 山中 慎太郎 キングモックト王工科大学トンブリ校 (KMUTT)

私は、食品保存に用いられる抗菌ペプチドであるナisinと有機酸を組み合わせることで、真菌に対する抗菌効果が高まるかを検証する実験を行いました。現地の大学院生と協力し、実験設計やデータ解析を行いました。研究を通じて、食品中の微生物制御に関する理解を深める貴重な経験となりました。

⑧大政研 天白 陸斗 キングモックト王工科大学トンブリ校 (KMUTT)

この度は海外フィールドスタディへの多大なるご支援をいただき、誠にありがとうございました。私は、昆虫細胞の抽出物を用いて無細胞系でタンパク質合成を行う研究を行いました。トラブルにより実験計画を何度も変更を余儀なくされましたが、現地の先生方と学生の助けのおかげで、合成とその解析を最後まで完了させることができました。研究や交流を通じて得た知見や経験を今後のキャリアの糧として、より一層精進して参ります。

⑨藤山研 青谷 汐莉 カセサート大学

私は複数のソフトウェアを用いてmRNAワクチンの設計を行う実験に取り組みました。日本では使用経験のないツールも多く、当初は戸惑うこともありましたが、現地の学生の手厚いサポートのおかげで、実験を円滑に進めることができました。

⑩内山研 千野 一翔 カセサート大学

ご支援いただきありがとうございました。私は植物病害に対する抗菌分子を細菌のゲノムデータから比較解析する研究を行いました。私にとって新たな分野・実験手法でしたが、教員や大学院生の協力を得ながら、計画の立案から発表まで主体的に取り組むことができました。今回の活動を通じて、英語でコミュニケーションを取りながらプロジェクトを進める自信と新たな研究スキルを得ることができました。

⑪福崎研 木村 文香 カセサート大学

今回、カセサート大学理学部に所属し、1ヶ月間のフィールドスタディに参加し、*Cavenderia subdiscoidea*由来のiii型ポリケチド合成酵素を大腸菌で発現させて有用代謝物を探索する研究を行いました。現地の学生や教授の支援のもと学びを深める中で自身の積極性や英会話への意欲が向上したと感じました。

この経験と学びを糧として今後も研究に励み、留学生とも積極的に交流していきたいです。暖かいご支援に心から感謝申し上げます。

⑫藤山研 寺田 賢人 カセサート大学

この度は SSSV プログラムにご支援いただき、誠にありがとうございました。タイでの 1 ヶ月間は、研究活動だけでなく、現地学生との交流や文化体験を通して、楽しみながら未知の環境でも成長できる力が身についたと感じています。研究テーマは、ウキクサと呼ばれる植物の成分抽出とその解析で、マイクロ波を用いた抽出法や GC-MS を用いた解析など初めての実験経験を積むことができました。研究以外の面では、香辛料の風味や辛さを特徴とする食文化や人々のフレンドリーさなど日本とは異なる価値観に触れることができました。このプログラムを通じて、自ら行動する大切さを学んだことは、今後の研究活動や人生において大きな糧になると感じています。皆様からのご支援に心より感謝申し上げます。

⑬藤山研 山下 貴大 マヒドン大学

この度は貴重な留学の機会をいただき、誠にありがとうございました。タイ産の耐熱性酵母を用いて、廃糖蜜を炭素源とした高温発酵下での脂質蓄積能を調査しました。製糖産業の副産物である廃糖蜜を用いた培養実験を計画から分析まで経験し、研究技術の向上に加えて英語での発表にも挑戦しました。また、現地学生や研究者との交流や企業・研究機関の訪問を通じ、研究の社会的意義や異文化への理解を深めることができました。今回得た学びを今後の研究活動や将来に活かしてまいります。

⑭本田研 津田 智世 マヒドン大学

この度は、バンコク留学に際し多大なるご支援を賜り、誠にありがとうございました。

タイの大学での 1 か月間の研究は、私にとって非常に貴重でかけがえのない経験となりました。研究活動では、タイで単離された希少放線菌の抗菌活性を調べる実験に取り組みました。この実験を通じて、微生物学の専門知識を深めるとともに、国際的な研究環境での実験手法やデータの取り扱いについて実践的に学ぶことができました。加えて、現地の学生との交流にも積極的に取り組み、英語やタイ語を用いて積極的に関わる中で、多くの友人を得ることができました。最終的には、SSSV に参加した学生の中で最も多くのタイの友人をつくることのできたと感じております。この経験を通じて、異文化の中でも臆せず関わる姿勢や、相互理解を通じて信頼関係を築く力を培うことができました。今回の留学で得た学びを人生の糧とし、今後さらに研究・勉学に励んでまいります。改めまして、このような貴重な機会をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

⑮福岡研 藤本 里佳 マヒドン大学

この度は SSSV プログラムに多大なご支援をいただき、誠にありがとうございました。私は、寄生虫症に対する薬剤ターゲットの同定を目的として研究に取り組みました。現地の先生方の手厚いサポートのもと、複数の解析ソフトを用いて回虫が持つ脂質に関するデータ解析を主に行いました。LC-MS/MS で得られた生データから薬剤候補を特定するまでの一連の過程を学ぶことができ、研究面で非常に貴重な経験となりました。

⑯藤山研 森 楓華 マヒドン大学

タイのマヒドン大学にて、リグノセルロースの加水分解で生じる生育阻害物質耐性を持つ酵母株

の育種に関する研究を行いました。この40日間の研修を通して、研究だけでなく、現地の方々と様々な交流を取れたことが非常に貴重な経験となりました。今回のフィールドスタディをサポートしてくださった尚醸会の方々に感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

令和 7 年度 尚醸会会計報告

	用途	金額 (円)
収入	令和 6 年度より繰越金	2,520,987
	令和 7 年度年会費 (ゆうちょ銀行振込)	234,038
	令和 7 年度年会費 (コンビニ振込)	283,400
	令和 6 年度年会費 (コンビニ振込) 振替漏れ	2,000
	尚醸会バイオテクノロジーセミナー会費	120,000
	受取利子	1,718
	合計	3,162,143
支出	名簿データ整理委託費	66,000
	会報、チラシ、発送費	200,200
	会報持込発送代	300,905
	二年生重要事項説明会懇親会	50,000
	OB・OG 懇談会補助費	12,000
	バイオテクノロジーセミナー旅費	45,000
	バイオテクノロジーセミナー懇親会	200,000
	尚醸賞賞状・楯作成費	14,400
	ゆうちょ Biz 利用料	24,200
	利用料 (ゆうちょ銀行)	14,328
	合計	927,033
収支	(令和 8 年度への繰越金)	2,235,110

令和 7 年度 学生国際活動支援金会計

	用途	金額 (円)
収入	令和 6 年度より繰越金	2,670,960
	受取利子	3,401
	合計	2,674,361
支出	SSSV フィールドスタディへの支援金	272,000
	合計	272,000
収支	(令和 8 年度への繰越金)	2,402,361

証明書

令和七年度大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和八年 五 月 二十八日

大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

Web 版のため印章部分を削除しました。

証明書

令和七年度大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和八年 五 月 二十九日

大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

Web 版のため印章部分を削除しました。

令和 6 年度 尚醸会会計報告の訂正

昨年度郵送いたしました同窓会会報第 28 号に記載の令和 6 年度会計報告（22・23 ページ）に誤りがありましたので、以下の通り訂正しております。

令和 6 年度 尚醸会会計報告

	用途	金額（円）
収入	令和 5 年度より繰越金	2,807,142
	令和 6 年度会費（ゆうちょ銀行振込）	232,652
	令和 6 年度会費（コンビニ振込）	297,400
	バイオテクノロジーセミナー会費	147,000
	受取利子	247
	合計	3,484,441
支出	尚醸会印鑑作成費	2,280
	名簿データ整理委託費	66,000
	会報、チラシ、発送費	213,400
	会報持込発送費	277,509
	二年生重要事項説明会懇親会	50,000
	OB・OG 懇談会補助費	30,000
	バイオテクノロジーセミナー旅費	80,000
	バイオテクノロジーセミナー懇親会	200,220
	尚醸賞賞状・楯作成費	18,018
	ゆうちょ Biz 利用料	13,200
	利用料（ゆうちょ銀行）	12,827
	合計	963,454
収支	（令和 7 年度への繰越金）	2,520,987

令和 6 年度 学生国際活動支援金会計

	用途	金額（円）
収入	令和 5 年度より繰越金	3,079,103
	受取利子	407
	合計	3,079,510
支出	SSSV フィールドスタディへの支援金	408,000
	手数料	550
	合計	408,550
収支	（令和 7 年度への繰越金）	2,670,960

本件、令和 7 年度総会で修正の説明があり、承認された。

証明書

令和六年度大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和 七年 五 月 二十六 日

大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

Web 版のため印章部分を削除しました。

証明書

令和六年度大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和 七年 九 月 五 日

大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

Web 版のため印章部分を削除しました。

大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会「尚醸会」会則

1. (名称)

本会は「尚醸会」と称する。但し、本会の預金口座名は「尚醸会」として取り扱うものとする。

2. (会員の構成)

本会は次の会員で構成する。

(1) 正会員

イ 大阪大学工学部、同大学大学院工学研究科ならびにその前身である学校の醗酵・生物工学系の前身学科、専攻の卒業生。

ロ 上記イの教室および付則に示す関連講座の旧教官・教員、現教員および現職員。

ハ 上記イの教室および付則に示す関連講座に関係のあるもの（旧職員、研究生、実習生など）で、入会を希望し会長が承認したもの。

(2) 名誉会員

会員の中から第 6 条に定める役員会の推薦により総会の承認を得たもの。

(3) 賛助会員

本会の趣旨に賛同し、付則に定める会費を納めるもので幹事会の推薦により総会の承認を得たもの。

(4) 学生会員

大阪大学工学部応用自然科学科バイオテクノロジーコースおよび同大学院工学研究科生物工学専攻生物工学コースに所属する学生。

3. (目的)

本会は会員相互の親睦を図り教室の発展に寄与することを目的とする。

4. (所在地)

本会の所在地は大阪府吹田市山田丘 2 番 1 号 大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻内とし、会員の希望により支部を設けることができる。

5. (役員)

本会には次の役員を置く。

- | | | |
|---------|-----|------------------------|
| (1) 会長 | 1 名 | 正会員の中から総会で選出する。 |
| (2) 副会長 | 2 名 | 正会員の中から会長が推薦し、総会で承認する。 |
| (3) 幹事長 | 1 名 | 正会員の中から会長が委嘱する。 |
| (4) 幹事 | 若干名 | 正会員の中から会長が委嘱する。 |
| (5) 監査 | 2 名 | 正会員の中から総会で選出する。 |

6. (役員の任務)

本会役員は、役員会を構成し、本会の運営を図る。役員の任務は次のとおりである。

- (1) 会長は本会を総理する。
- (2) 副会長は会長を補佐する。
- (3) 幹事長は幹事を総括して会務を掌理する。
- (4) 幹事は庶務、財務、企画、編集の事務を行う。

- (5) 監査は本会の運営と会計を監査し、総会に報告する。
7. (役員の任期)
- 役員の任期は2年とし再任を妨げない。
8. (名誉会長)
- (1) 本会に、名誉会長をおくことができる。
- (2) 名誉会長は役員会が推薦し、総会の承認を得て委嘱する。
9. (会議)
- (1) 本会は原則として2年に1回総会を開き、役員の改選、会計報告、会則の改正、その他重要な事項を議する。
- (2) 総会の議決には出席正会員の過半数の賛成を必要とする。
10. (会計)
- (1) 本会運営の経費は会費およびその他の収入を持ってあてる。
- (2) 会費は付則に定める金額とする。
- (3) 名誉会員および学生会員からは徴収しない。また、卒業後50年以上の会員は会費を免除する。
- (4) 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。
11. (会則の変更)
- 本会の会則は総会において出席正会員の三分の二以上の賛成を得て改正することができる。ただし、書面を持って賛否を表す場合は出席とみなす。

付則

1. 本会の設立日は平成8年11月15日である。
2. 生物工学系とは、大阪大学工学部応用自然科学科バイオテクノロジーコースおよび同大学院工学研究科生物工学専攻生物工学コースならびに、それらの前身とする。関連講座については、適宜役員会で協議の上、定義する。
3. 本則第9条の会費は次のとおりとする。
会費 正会員は年額2,000円、賛助会員は年額1口 5,000円。
4. 本則第4条の規定に従い、本会に関東支部を置く。
5. 付則の変更は役員会の議をもって行う。
6. 本会則は平成8年11月15日から施行する。

令和3年11月13日改訂

☆同窓会現組織（令和 8 年度）

会長	原島俊（昭和 47 年卒）	
副会長	新城雅子（昭和 52 年卒）、根来誠司（昭和 52 年卒）	
幹事長	藤山和仁（昭和 59 年卒）	
幹事		
（企業幹事）	玉田佳大（平成 22 年卒）	白鶴酒造（株）
	大橋博之（平成 25 年卒）	（独）大阪産業技術研究所
	谷口百優（平成 27 年卒）	（株）島津製作所
	中島慎太郎（令和 2 年卒）	武田薬品（株）
（庶務担当）	原田和生（平成 14 年卒）、梶浦裕之（平成 15 年卒）、 岡橋伸幸（平成 24 年卒）、山口祐希（平成 30 年卒）	
（財務担当）	鳥巢哲生（現教員）、酒井香奈江（平成 15 年卒）	
（名簿担当）	大政健史（昭和 61 年卒）、内山 進（現教員）、 SastiaPutri（平成 22 年英語コース卒）	
（編集担当）	戸谷吉博（現教員）、山本 陸（平成 27 年卒）、川本晃大（現教員）	
（企画担当）	新聞秀一（現教員）、玉田佳大（平成 22 年卒；企業幹事兼）、谷口百優 （平成 27 年卒；企業幹事兼）、中島慎太郎（令和 2 年卒；企業幹事兼）	
監査	光島健二（昭和 47 年卒）、片倉啓雄（昭和 57 年卒）	

☆会員の動向（最近の動向がございましたなら、同窓会までご一報下さい）

●教職員の異動（令和 7 年 9 月から令和 8 年 5 月まで）

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

●会員訃報 心よりご冥福をお祈り申し上げます。

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

●令和 8 年 3 月卒業、修了生進路等（工学研究科教務係提出資料より）

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

同窓会からのお願い

近年、企業合併や部署移動、市町村合併によって、住所変更や所属変更となる会員が増えておられます。これらに変更が生じた場合、同窓会（doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp）までご一報ください。なお、お寄せ頂いた個人情報は、尚醸会個人情報保護方針（<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/jusho.html>）に従い、適切に対応いたします。

●教室の構成（令和 8 年 5 月 1 日現在）

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

- クラス会幹事（クラス会幹事の方には会員の所属の移動等について同窓会への連絡をお願いいたします）

昭和 23 年	佐瀬 勝	昭和 49 年	小西喜朗	平成 12 年	井戸芳博
昭和 24 年	野口祐一	昭和 50 年	中塚正博	平成 13 年	後藤優治
昭和 25 年	足立 有	〃	東浦忠司	平成 14 年	有岡伸悟
昭和 26 年		昭和 51 年	溝口晴彦	平成 15 年	新家康弘
昭和 27 年		昭和 52 年	根来誠司	平成 16 年	和田 悠
昭和 28 年（旧制）	石川正人	昭和 53 年	金子嘉信	平成 17 年	藤井健治
昭和 28 年（新制）	高野光男	昭和 54 年	高木 睦	平成 18 年	鳳桐智治
昭和 29 年	嶋谷幸雄	昭和 55 年	滝沢 昇	平成 19 年	高木康弘
昭和 30 年	大嶋泰治	昭和 56 年	阿野貴司	平成 20 年	木村修一
昭和 31 年		昭和 57 年	片倉啓雄	平成 21 年	外尾竜太
昭和 32 年		昭和 58 年	森川正章	平成 22 年	井村 誠
昭和 33 年	中桐義隆	昭和 59 年	藤山和仁	平成 23 年	吉田真理
昭和 34 年	野本哲也	昭和 60 年	中嶋幹男	平成 24 年	吉田隆史
昭和 35 年	森元英雄	昭和 61 年	大政健史	平成 25 年	長澤宏器
昭和 36 年		昭和 62 年	山本恵三	平成 26 年	都倉知浩
昭和 37 年	菅 健一	昭和 63 年	向由起夫	平成 27 年	小幡佑季
昭和 38 年	藤田新三	平成元年	永尾寿浩	平成 28 年	吉富耕太
昭和 39 年	藤田正憲	平成 2 年	松本雄大	平成 29 年	花谷耀平
昭和 40 年		平成 3 年	鈴木市郎	平成 30 年	光吉祐太郎
昭和 41 年	関 達治	平成 4 年	内山圭司	平成 31 年	有島凜太郎
昭和 42 年	卜部 格	平成 5 年	滝口 昇	令和 2 年	黒田将輝
昭和 43 年	関口順一	平成 6 年	松浦友亮	令和 3 年	安倍 玲
昭和 44 年	土戸哲明	平成 7 年	永久圭介	令和 4 年	川本優一
昭和 45 年	古川憲治	平成 8 年	金谷 忠	令和 5 年	川西寿和
昭和 46 年	山本忠行	平成 9 年	小林 肇	令和 6 年	時田好典
昭和 47 年	原島 俊	平成 10 年	田中礼央	令和 7 年	安達凌輝
昭和 48 年	曾根良昭	平成 11 年	永塚由佳	令和 8 年	浜村美希

- * 昭和 22 年以前は、クラス幹事不在のため省略しております。
- * クラス幹事が不在の学年は、ご相談の上、同窓会事務局までお知らせください。
- * 各学年での同窓会等の行事を開催した場合は、是非同窓会までご一報ください。その際には、簡単な概要説明と写真などを添えて頂けると幸いです。

会員各位

名簿担当からのお知らせとお願い

①大阪大学生涯メールアドレスをお知らせください。

大阪大学を卒業・修了された方に、生涯使えるメールアドレス「XXXX @ alumni.osaka-u.ac.jp」が大阪大学から提供されています。大阪大学の Web メールシステム（OUMail）を用い、インターネット環境下ならどこでも送受信でき、自動転送設定も可能です。

平成 26 年 3 月以降の卒業・修了生＝すでに利用可能です

卒業・修了時、全員に OUMail 生涯メールアドレスが設定されています（申し込み不要）。

アドレスは、卒業の翌月初めに、在学中の大阪大学個人 ID をもとに自動で切り替わっています
(例：u123456a@ecs.osaka-u.ac.jp ➡ u123456a@alumni.osaka-u.ac.jp)。

※在学中のパスワード、メールデータ、連絡先などの設定は自動で引き継がれます

※大阪大学の中で進学される方には、その課程を修了後に贈呈します

平成 26 年 2 月以前の卒業・修了生＝新規発行となります

アドレスは、申込者の氏名に基づき、下記の形となります。

【姓 - 名 - 英字 2 字（自動割り当て）】@alumni.osaka-u.ac.jp

申し込み等、詳細は下記の大阪大学の HP をご参照ください。

(<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/campus/alumni/support/oumail>)

なお、生涯メールアドレスを取得された後、**doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp** にもアドレスをお知らせ頂ければ幸いです。尚醸会からの同窓会案内等を当該アドレスにお送りさせていただきます。

②個人情報保護法の改正について

個人情報保護法の改正にともない、尚醸会の管理する個人情報も当法案の対象となりました。尚醸会では、すでにプライバシーポリシーを設定（2009.11.13）しており（<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/kojin.pdf>）、改正された個人情報保護にも対応しておりますのでご安心ください。

会員各位

会員の皆様には、平素より同窓会活動にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。2026年7月の熊本地震により被災された皆様に、心からお見舞い申し上げます。今回の災害では、ご自宅等に直接的な被害を受けられた方のみならず、災害の影響により日常生活にさまざまな不便を強いられている方もおられることと存じます。そこで、熊本地震に伴い災害救助法が適用された地域にお住まいの会員の皆様につきましては、本年度に限り、年会費を免除させていただくことといたします。会費免除を希望される方は、住所、氏名、卒業年を doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp にご連絡ください。罹災証明書等の証明書類は必要ございません。会員ご自身の判断によりお申し出いただければ結構です。

なお、会費免除の対象とならない会員の皆様には、今後も同窓会活動を継続・充実させていくため、会費の納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

本年度より会費の納入方法を一部変更いたしましたので、ご案内申し上げます。これまで会費の振込先として利用しておりました郵便貯金口座につきましては、口座維持手数料や振込用紙作成費用等の負担増加に伴い、閉鎖する方向で進めさせていただきたく存じます。このため、従来の郵便貯金口座へのお振込みおよび自動払込はご遠慮いただけますようお願い申し上げます。これまで自動払込をご利用いただいていた皆さまには、長年にわたり継続して会費をご納入いただきましたことを、心より御礼申し上げます。今後は、同封の振込用紙をご利用のうえ、会費をお納めいただきますようお願い申し上げます。

何卒ご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

下記要領で令和8年度会費の納入をお願いしております。

記

払込用紙にて納入

同封の払込取扱票を用いて、コンビニエンスストア、スマートフォンにてお振込下さい。今年度より同封させていただいております振込用紙は郵便局からのお振込が出来ない仕様となっております。ご不便をおかけしますがご理解のほどよろしくお願いいたします。用紙の変更に伴い、手数料込の金額を表示するようになっておりますが、会費（一口2,000円）および手数料に変更はありません。

♪♪♪♪♪ 同窓生のみなさまへ会費免除のお知らせ ♪♪♪♪♪

いつも会費納入にご協力いただきまして誠に有難う御座います。

同窓生のみなさまは卒業後50年経過しますと会費免除となります。

令和8年度は昭和51年卒の同窓生が該当致します。会誌送付や諸行事への参加などは今までと変わりありません。今年から免除になられた同窓生及びすでに免除になっておられる同窓生の皆様には、長い間会費を納入していただきまして有難う御座いました。今後も同窓会へのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。



大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物学・
バイオテクノロジー（学科目担当）教室・同窓会
同窓会会報 第 29 号

令和 8 年 9 月 19 日 発行

印刷所 中西印刷

発行人 同窓会幹事長 藤山 和仁（昭和 59 年卒業）

〒 565-0871

吹田市山田丘 2-1

大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻内

ホームページ

<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/>

電子メール

doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp